

康熙三十年の会試における不正(關節)について

Corruption (Bribing of Examiners [guanjie]) in the 1691 Metropolitan Examination

滝 野 邦 雄
Takino, Kunio

ABSTRACT

In this paper I bring to light a matter concerning corrupt behavior (bribing of examiners) on the part of examination officials in the 1691 metropolitan examination. Hitherto, matters of impropriety in the civil examination system have been limited to what has been transmitted concerning cunning practices of examinees. In my paper, however, based on the evidence of Li Guangdi, one of the examination officials, I provide an account of how examiners graded examination papers and colluded with examinees to engage in corrupt behavior. Furthermore, I also bring to light the case of the great literary figure, Wang Yuyang, who, through the improper grading of examination paper, sought to favor his own students. I describe how, as a consequence of such behavior, rather than being regarded as a mechanism whereby only the those with ability were selected for office, in fact, the civil examination system increased the possibility that those powerful people with connections would pass.

錢大昕(雍正六年〔1728〕～嘉慶九年〔1804〕)は、次のようなことがあったと伝えている。

丙午(乾隆五十一年〔1786〕), 江南の鄉試 鄉黨篇を以て命題あり①。士子先生(江永)の説を主とする者は、皆な中式^{ごうかく}を得。是に由りて海内 益々其の學を重んず(「江先生永傳」・『潛研堂文集』卷三十九・十四葉)。

①『國朝貢舉考略』(卷二・四十八葉)によると、この時の四書題のうち

『論語』は郷黨篇の「位を過ぐれば、色 勃^{かく}如たり、足 躩^{かく}如たり、其の言うこと足らざる者に似たり。齊を攝^{かか}げて堂に升るに、鞠躬如たり」の二節についてであった。考官(採点官)は、朱珪と戴心亨とである。

乾隆五十一年の江南の郷試において、江永の『郷黨圖考』の学説にそって回答したものばかりが及第したため、江永(康熙二十年〔1681〕～乾隆二十七年〔1762〕)の学問が持てはやされた、というのである。そもそも、論文形式の試験は、採点官の主観が入りやすい。そのため、受験生は、採点官の好みの文章を作ろうと涙ぐましい努力をしていたことを示す逸話である。

では、ほんとうに特定の採点官の好みのみによって及第者が決まったのであろうか。李光地は、康熙四十二年の會試の直後に次のように述べる。

癸未(康熙四十二年)三月廿八日、師(李光地) 言う「上(康熙帝) 臨軒し熊中堂(熊賜履)に問うに『汝 場中に在りて、會試の文章を看るに、是れ自己(じぶん)で獨り斷ずるか、還是(やはり)衆人(そうだん)が商量するか』と。熊[賜履] 云う『是れ衆人 商量す』と。其れ寔(まこと)には熊[賜履]が會元を定む。[採点の]後、許時菴(許汝霖) 私(ひそ)かに吳容大(吳涵)に對して説う『この文章は通ぜず。如何ぞ會元と做し得ん』と。聲微かに高く、熊[賜履]

之を聞き、大いに怒りて曰く『老先生(許汝霖)は新たに聖眷(天子の拔擢)を膺(う)くの人なり。自然と文字を識り得ん。學生(熊賜履) 那(どうして)文字を認得せんや。學生(熊賜履) 出でんことを請う』と。吳[涵] 從旁(そばか)ら挽留(ひきと)め、勸解(ちゅうさい)して止む。此の番は、陳澤州(陳廷敬)は終始 一巻も看ず。只是病(ただい)と説うのみ』と(『榕村語録續集』卷十八・治道・三十四葉)。

(康熙四十二年三月二十八日に、李光地先生が次のような話をされた「康熙帝が軒に臨んで熊賜履に質問された『科擧の試験場で、會試の答案を採点するのに、一人で決定するのであるか、やはり皆で相談して決めるのか』と。熊賜履は『皆で相談いたします』と言う。ところが實際は熊賜履が會元(第

一位及第者)を〔王式丹に〕決めていた。〔採点の〕後で、許汝霖が呉涵にこっそりと『この答案は意味が通じない。どうして会元とすることができるのだろうか』と言った。その声はすこしばかり大きく、熊賜履はそれを聞くとたいそう怒り『許汝霖先生は、新しく天子様の拔擢をお受けになった方です、だからおのずと文章のこともご存じでございましょう。私(熊賜履)はどうして文章が分かりますでしょうか。私(熊賜履)は行かせていただきます』と言った。呉涵はそれを引き止めて、なだめてようやく納まった。また、今回の試験監督では、陳廷敬はまったく採点せず、ただ病気で気分が悪いと言うのみであった」と)

康熙四十二年の会試を採点した時の様子である。この時の、正考官は、熊賜履と陳廷敬で、副考官は、許汝霖と呉涵であった。会試の第一等及第者を「会元」と呼ぶ。熊賜履は、この「会元」を他の考官の意見を聞かずに王式丹に決定したという。

ちなみに熊賜履は、康熙十二年に会試の副考官となり、康熙三十三年・三十六年・三十九年・四十二年には、会試の正考官となっている。五回にわたって会試の考官となったのは、清朝を通じて五人しかいない。李光地はこのことを批判して言う。

〔熊賜履が〕會試を典すること五科に至りて、天下の文風を把^もって壊ち到りて收拾する可からず。底裏(実情) 盡く露われ、始めて他^{かれ}(熊賜履)をして位を退かせ以て卒す。豈に畏る可からざらんや(『榕村語録續集』卷九・本朝人物・十一葉)。

(〔熊賜履が考官として〕会試を監督することが五回となって、天下の学問の風気を破壊しつくして收拾できなくしてしまった。その実情がことごとくはっきりして、始めて熊賜履を退官させて世を終わらせた。ほんとうに恐ろしいことである)

李光地は、熊賜履が会試の考官として、学術の面に対してかなりの影響力を持っていたと言っているのである。

なお、この会試で熊賜履が会元に定めた王式丹は、次の殿試で、はじめは二甲二名(第五位)となっていたが、康熙帝の一言で狀元(第一位)に改められる。

癸未(康熙四十二年)の殿試、讀卷官^{もと}元もと一名を汪公紫滄(汪灝)、二名を查公慎餘(查慎行)、三名を錢公亮工(錢名世)、公(王式丹)を第五に、趙公^マ二今(趙晉)を第六に擬す。聖祖(康熙帝) 公(王式丹)の卷を開て、因りて趙公(趙晉)の卷に及ぶ。故に遂に併せて一名・二名を「王式丹と趙晉とに」易う(「翰林院修撰叔父樓邨王公行狀」・『白田草堂存稿』卷十八・十七葉)。

この後、正考官の熊賜履と一名・二名に変更された王式丹・趙晉とは、つぎのようなことがあったらしい。

職を授けらるるの後、公(王式丹) 毎事多く之(趙晉)と議す。趙[晉] 方に盛年にして才名を以て自負するも、公(王式丹) 其の上に居れば、頗る樂しまず。[しかし] 公(王式丹) 察せざるなり。孝感熊公(熊賜履) 使事を以て出るに妾を留めて京師に居らす。公(王式丹) 趙[晉]に往きて謁す可きや否やを問うに、趙[晉] 曰く「此れ師の母に非ざる也。往くこと勿る可し」と。公(王式丹) 之に従う。而るに趙[晉] 遂に自ら往きて謁す。且つ厚饋もて殷勤を致す。孝感公(熊賜履) 歸り、妾 以て公(熊賜履)に言う。孝感公(熊賜履) 遂に公(王式丹)を以て師に薄しと為す。而るに趙[晉]の特厚は、趙[晉]の計が適中するを知らざる也。諸事 此の類のもの多し。其の後、公(王式丹) 亦た之を知り、往來 甚だ疎し(「翰林院修撰叔父樓邨王公行狀」・『白田草堂存稿』卷十八・十七葉)。

このように採点にあたっては、採点する考官たちの意向がかなり反映したようである。そこで、以下において李光地の証言を通して、考官たちが実際にどのようなして採点していたのかを見てみたい。

(1) 李光地と会試と

李光地は、康熙三十年に会試の副考官に任命される。この時、張玉書と陳廷敬とが正考官で、李光地と王士禛とが副考官であった。

壬戌、大學士の張玉書・工部尚書の陳廷敬を會試正考官と爲し、兵部左侍郎の李光地・兵部督捕右侍郎の王士^{ママ(1)}正を副考官と爲す(『聖祖實錄』卷一百五十・康熙三十年二月壬戌(六日)条)。

張玉書によれば、この會試の受験者は2500名あまりであった。

歳は辛未(康熙三十年)に在りて、天下の貢士の試を禮部に待つ者は二千五百有奇なり(「辛未科會試録序」・『張文貞集』卷四)。

会試採点の最高責任者の一人となった李光地は、採点の同僚となった張玉書と陳廷敬とを次のように評している。

本朝の人物 魏環溪(魏象樞)・湯潛菴(湯斌)を以て第一流と爲す。他ら兩箇(ふたり)實實に天下もて好くするを要める^{もと}の意思有り。京江(張玉書)就^{すな}わち此の意を少く。澤州(陳廷敬)京江と同じからずと雖も、然れども亦た此の意を^か少く(『榕村語録續集』卷九・本朝人物・二葉)。

(我が清王朝の人物では、魏象樞と湯斌とが第一流であろう。この二人は、実際に世の中をよくしようという意志を持っていた。張玉書には、その気概はなかった。また、陳廷敬も、色々な面で張玉書とは異なってはいたけれども、気概がないという点では同じであった)

二人とも、それほど政治に対する気概を持っていなかった、というのである。

さらに、李光地は、張玉書を次のようにも評する。

京江張玉書の勤慎淡泊に過ぎるは、眞に是れ大いに難きことなり。此の人眞に是れ自ずから一家を成すも、其の文・其の詩^{すべ}都て是れ氣概なし、你^{なんじ}

(1) 王士禛の没後、後人が雍正帝の諱の胤禛を避けて、王士正とした。ところが、雍正帝の子の乾隆帝は「正」字と改めたのでは本来の「禛」字と隔たりがありすぎるということで王士「禛」とするようにした。以後、王士禛と称されるようになる。しかし、拙稿では本来の名である王士禛を用いる。

もし他^もれ好^かからずと説かんとするも、卻^かって句々 穩當なり。即ち時文(八股文)の如きは、熊次侯(熊伯龍)・韓少宰(韓爌)の筆氣なしと雖も、然れども亦た甚だしくは敗闕(しっばい)なきなり(『榕村語録續集』巻九・本朝人物・四葉)。

(張玉書の堅苦しく真面目すぎるということは、本当によくないことである。この人は、本当に独特の個性を持っている。しかし、その文章・詩などはまったく気概が感じられない。あなたが、もしも張玉書の詩文が好くないと言おうとしても、却^かって張玉書のもものは個々には穩當なのである。また、八股文に関しても、熊伯龍・韓爌の筆の勢いというものはないが、甚だしい欠点はない)

真面目すぎてつまらない。文章も欠点がないが、勢いが感じられないという。可もなく不可もない作者であったというのであろうか。

王士禛については、李光地はなにも述べていない。ただ、王士禛自身が李光地に次のように冗談を言われたと述べている。

李少司馬厚菴^{光地} 戯れに予(王士禛)に謂い「昔人謂へらく『讀書の聲と紡績の聲とは、凡ての人家に有らざる可からず』と。公(王士禛) 朝審の班に會議する中に在るに、屢しば正論有りて、肯て唯阿(唯々諾々と)せず。此の聲 亦た朝廷の上に有らざる可からざる者なり」と(『居易録』巻十三)。

さて、嘉慶九年『欽定科場條例』⁽²⁾によると、会試の採点の最高責任者である正・副考官は、進士出身の大学士(正二品)・尚書(正二品)以下、副都御史(正三品)

(2) 王鍾翰先生の「清代各部署則例經眼録」(『清史續考』華世出版社・1993年刊所収)と『清代内府刻書目錄解題』(紫禁城出版社1995年刊)とによれば、『欽定科場條例』には、次のような版本がある。

乾隆六年	……四卷二冊	嘉慶九年	……五十八卷十二冊
嘉慶二十一年	……六十卷十八冊	道光十四年	……六十卷二十冊
咸豐二年	……六十卷二十四冊	光緒十三年	……六十卷四十冊

拙稿においては、以下『欽定科場條例』からの引用の場合、嘉慶九年(1804)五十八巻のものによる。なお、嘉慶九年『欽定科場條例』とそれ以後のものとは、細かなところで相違があるが、煩瑣になるのでいちいち指摘はしない。

以上の資格を有している者から選ばれた。その選考は、三月四日以前に行なわれ、内示があり六日に朝服を整えて午門に至り宴会を行なってから貢院(試験場)に入場する『欽定科場條例』(巻九・會試考官一・一葉)。

不正が入り込まないように、任命されたら直ちに試験場に入り、外部と連絡がとれないようにするのである。

こうして正・副考官たちは、任命されると、すぐに試験場に入場した。李光地は、張玉書と同じ部屋で採点することになった。

辛未(康熙三十年)の場は、予(李光地)と京江(張玉書)と一房なり。阮亭(王士禛)・澤州(陳廷敬)は一房なり。王・陳 亦た俱に病と説うも、實は精神(きもち) 短(自信がない)なればなり。故あるにあらざるなり。然れども大家(みんな) 尚お講書の旨を争い論ず。既に命を受くれば、且つ先ず其の事を敬す(『榕村語録續集』 卷十八・治道・三十四葉)。

(康熙三十年の会試の採点するにあたって、私、李光地と張玉書(京江)とは同じ房におり、王士禛(阮亭)と陳廷敬(澤州)とが同じ房になった。また王士禛と陳廷敬とはともに病気と言っていたが、實際は採点することに自信が持てなかっただけであり、病気でもなかったのである。しかし、皆でいっしょに、試験問題の内容について議論した。もうすでに任命されたのだから、先ずは仕事をちゃんとしなければならない)

『榕村語録續集』に「予(李光地)と京江(張玉書)と一房なり。阮亭(王士禛)・澤州(陳廷敬)は一房なり」とあることからすると、正考官の張玉書と副考官の李光地とがひと組になり、正考官の陳廷敬と副考官の王士禛とが別のひと組になって、それぞれの房にいたようである。

また、『欽定科場條例』によれば、康熙三十年の時点では会試の試験は三場に分けられていた。康熙三十年の時点では一場が四書義三題と經義四篇、二場が論一題と詔・誥・表各一通と判五條、三場が策問五道となっていた。

順治二年 定めるに郷・[會]試の第一場は四書義三篇と經義四篇とを試み、第二場は論一篇と詔・誥・表 各一通と判五條とを試み、第三場は策五道

を試みる、と(『欽定科場條例』卷十三・三場試題一・八葉)。

ただ、康熙二十九年には、郷試・会試の二場の論題に『性理大全』・『大極圖説』・『通書』・『西銘』・『正蒙』からも出題するように提議されて施行されている。『孝經』は短いために、出題に適したところがなくなってしまったからである。

康熙二十九年、議もて准けたるに、郷・會試の二場、『孝經』の論題 甚だ少なし。嗣後の考試には、『性理 [大全]』・『大極圖説』・『通書』・『西銘』・『正蒙』を將^もつて一併に命題せよ、と(『欽定科場條例』卷十三・三場試題一・八葉)。

『國朝貢舉考略』(卷二・二十七葉)によると、この時の四書題は「顔淵・季路」章(『論語』公冶長)・「博厚所以」節(『中庸』二十六章)・「非其義也、非其道也、一介不以與人、一介不以取諸人」(『孟子』萬章上)であった。また、三場の策問は、正考官の一人であった張玉書が出題した。それは、張玉書の文集である『張文貞集』卷八に「辛未會試策問五道」として収められている。なお、採点に関しては四書題の答案に重きが置かれていたようである。

[康熙]二十四年、給事中の楊爾淑の請を用いて、禮闈及び順天試の四書題は俱に命を欽む。時に詔・詰題は、士子 例として作らず。文・論・表・判・策は率ね雷同剿襲多く、名づけて三場並試と爲すも、實は則ち首場を重しと爲す。首場は又た四書藝(四書題)を重しと爲す(『清史稿』卷一百八・志八十三・選舉三)。

さて、いよいよ採点が始まる。李光地はその様子を以下のように述べる。

京江(張玉書)未だ巻を進めざる三日の内に于いて、皆な前の三題・『[性理]大全』を看^よむ。京江(張玉書) 惠周惕を定めて[會]元と爲さんとする時に到りて、王阮亭(王士禛) 之を見て云う「中に『子路・顔淵は皆な貧人なり』と説うも、那裏(どこ)に裘・馬・勞・善あらん①」と。[また]嗤いて云う「甚だ鄙俚なり。如何ぞ[會]元と^な做し得ん」と。京江(張玉書) 之に従う。又た張孝時もて[會]元と擬するに、阮亭(王士禛) 其の太平なるを嫌い、亦た遂に已む。後、楊名時を定めて[會]元と爲すは、已に三日なり

(『榕村語録續集』巻十八・治道・三十四～三十五葉)。

①『論語』公治長に「顔淵・季路 侍す。子 曰く『盍ぞ各々爾の志を言わざる』と。子路 曰く『願わくは車^馬衣輕^裘、朋友と共にし、之を敝るとも憾み無し』と。顔淵 曰く『願わくは^善に伐ること無く、^勞を施すこと無し』と。子路 曰く『願わくは子の志を聞かん』と。

子 曰く『老者は之に安んじ、朋友は之を信じ、少者は之を懷^{なつ}けん』と」。(張玉書は、回答が揃わない三日の内に、最初四書題の答案と『性理大全』の答案とを読んだ。そして張玉書が、惠周惕の答案を第一位(会元)としようとした時、王士禛は、それを見て言う「この惠周惕の文章の中では『子路・顔淵 皆な貧人なり』と言っているが、いったいどこに『裘・馬・勞・善』(『論語』公治長)のことがあるのか」と。そして嘲笑って「たいへん田舎臭いものだ。どうして会元なんかにできるのか」と言う。そのため張玉書は、その意見に従った。また、張孝時の答案を会元にしようとする、王士禛はその太平(へいぼん)なのを嫌ったために、とうとうやめになった。後に、楊名時を会元と決定するのに、三日かかってしまった)

最初は、惠周惕が第一位及第者(会元)となりそうであったのを、王士禛が反対し、次いで張孝時に決めようとする、また王士禛が反対した。そして、楊名時に決定するまでに三日もかかったというのである。

なお、最初に会元に擬せられた惠周惕は子の惠士奇・孫の惠棟とともに惠氏三代の学と称されるようになる人物である。『清史列傳』(巻六十八・儒林傳下一)や『己未詞科録』(巻首・九葉)などには、惠周惕は康熙十八年の博学鴻儒科に挙げられたが、憂いに丁り、受験しなかったとある。

王士禛自撰・惠棟註補『漁洋山人自撰年譜』の惠棟による註補によると、この時の会試については次のように述べている。

[惠] 棟の先王父の硯谿公(惠周惕)、是の年(康熙三十年)を以て進士と成る。榜の後、山人(王士禛)に謁し、甫めて坐に就くに 山人 謂いて曰く「閩中に君の巻を得たり。張[玉書]・陳[廷敬]・李[光地]の三公 皆な第一に

擬せんと欲するも、予 獨り之を難しとし、因りて第六に置く。數十年の老門生の暗中に模索する(独自に努力する)を以てしても、反って予(王士禛)を以ての故に「會」元を得ざるは、豈に恨み事に非ずや」と。歎息すること之を久しくす。蓋し先王父(惠周惕) 康熙八年に贅を山人に執る。今に迄ぶに已に二十三年なり(『漁洋山人自撰年譜』卷下・康熙三十年辛未条)。

惠棟の祖父の惠周惕は、もともとは第一位で合格のはずであったのが、王士禛によって第六位にされてしまった。何故なら、惠周惕は王士禛の二十三年来の門人であったためだ、という。

そもそも答案は、名前を分らないようにしたうえ、事務官の手で筆写され試験官の手にわたるので、普通は誰の答案なのかは分らないようになっている。ところが、王士禛には惠周惕の答案が分かっていたのである。

さて、こうして楊名時が第一位と決まったのであるが、その次の日に陳廷敬が異議を唱えにくる。李光地は言う。

一日、澤州(陳廷敬) 侵早(朝早く)に忽ち予(李光地)と京江(張玉書)との房に至る。^か渠れ敢えて輕々しく門を出でざる者なり。予(李光地)と京江とは即ち迎え入れ、座 定まる。澤州(陳廷敬)語 甚だ悦容にして曰く「昨の會元の文字、三場の力量 俱に足れり。文字は亦た蘇・曾の體に似たり。但だ學生(陳廷敬) ^ほ略ぼ放些(きまりからややはずれる)なるを覺得(おぼえる)。我們(われわれ) 初めて入場せし時、文體を正すことを要す。條約(やくそく)の言う所を出すものと、稍や背些(すこしそむ)くを覺えるに似たり。愚見 此の如し。未だ是否を知らず」と。京江(張玉書) 尚お未だ答えず。予(李光地) 即ち之に和して云う「甚だ是なり。如今(いま)再び搜さん」と。澤州(陳廷敬) 又た云う「之を搜して得ざれば、即ち此れを用いよ。如し此れより好き者あれば、之に易えん」と。是に於いて京江(張玉書) 予(李光地)に見すに張瑗^{しめ}の卷の經[についての答案]に文字に圈満なるを將つてす。蓋し張[瑗]が易經[についての答案の]文は歸震川(歸有光)を直抄する者多し。故に同じからざるを覺得(おぼえる)す。京江(張玉

書) 即ち其の四書の文字を熟視して謂へらく「此れ[會]元と作す可し」と。予(李光地)云う「亦た擧ぐ可し」と。陳[廷敬]・王[士禎]を視るに、皆な以て然りと爲し、遂に定まる。[だから會元を決定したのは]全く争い論ずるを要するなり。今より之を觀れば、張瑗の三作は果たして楊名時に勝れるや。豈に澤州(陳廷敬)の力を得ざらんや(『榕村語録續集』卷十八・治道・三十五葉)。

(次の日、陳廷敬が朝早くにいそいそと私(李光地)と張玉書との部屋(房)にやってきた。陳廷敬は簡単には部屋を出ない人物であった。私(李光地)と張玉書とは迎え入れて、座席が定まった。陳廷敬の言葉はたいへん弾んでおり「昨日会元と決めた楊名時の文章は、三場ともすぐれており、文体もまた蘇[三蘇]・曾鞏に似ています。但し私はそれが些かずれているような気がするのです。私達がこの試験場に入場する時、文体を正しくしようと確かめあいました。[そこからするとこの答案はその] 取り決めの言うところからは、少し外れているように感じます。私の考えは以上であり、正しいかどうかはわかりませんが」と言う。張玉書はずっと答えない。私(李光地)はそれに同意して「確かにそうです。いま、[別にすぐれたものを] 搜しましょう」と言った。陳廷敬は「ここを搜していいのがなかったら、[もとから會元と定めた] 楊名時のものにしましょう。もしも[楊名時のものより] 優れたものがあれば、取り替えましょう」と言う。そこで、張玉書は、私(李光地)に張瑗の經書についての答案の圈点がいっぱいになっているものを見せた。張瑗の易經についての答案は、[明代の八股文作者としても有名な] 歸有光の文章をそのまま写したところが多かったのである。だから、新鮮味があった。張玉書は、すなわち張瑗の四書題の答案を熟視して「これこそ會元とすべきだ」と言った。私も「そうすべきです」と言う。陳廷敬も王士禎も同意し、やっと會元が定まった。[こうなるまでに] たいそうな議論が必要であった。今になって考えてみると、張瑗の三題の答案は、果たして楊名時に勝っていたのであろうか。陳廷敬の力を得たためではなかつ

ただらうか)

李光地は最終的に会元に決まった張瑗の答案よりも楊名時のものを優れたものとしていたようである。なお、このことが影響しているのかわからないが、『榕村譜合考』(巻上・康熙三十年辛未条・六十三葉)には、

是の歳(康熙三十年)、江陰の楊賓實[名は]名時と松江の張長史[名は]曷從學す(『榕村譜合考』巻上・康熙三十年辛未条・六十三葉)。

とあり、この楊名時と張曷の二人がこのすぐ後に李光地の門生となっている。

さて、こうして、ようやく張瑗が第一位の会元に決まった。しかし、それはまったく陳廷敬が頑張ったためであるという。

なお、『欽定四書文』(本朝四書文・上論・六十葉)には、張瑗の「顔淵子路」章の四書文が収められ、原評も付せられている。それによると、張瑗のものは、

理解 精密、骨格 安舒、^{かつりよく}原氣 渾淪にして、居然たる瞿(瞿景淳)・鄧(鄧以讚)の家法なり

と評されている。

さらに、李光地によると、王士禛は呉曷の答案に執着し、呉曷を五番以内にしたいとした。李光地は述べる。

又た阮亭(王士禛) 呉曷の巻を薦めること甚だ力め、五名の内に置かんと欲す。京江(張玉書) 躊躇す。阮亭(王士禛) 即ち怒りて云う「難道(まさか)この様な卷子は、你(なんじ) 好(かたん)に他をして中らしめざるか」と。京江(張玉書) 亦た怒り點頭(微かに頭を下げ)して低く答えて云う「也^またこの意思あり」と。阮亭(王士禛) 即ち巻を案(つくえ)に擲(なげう)ちて去る。京江(張玉書) 予(李光地)に向かいて云う「鬚子(王士禛) 笑う可し。この卷子の文字は中る可し。只是(ただ)中に三編有りて結語は皆な虚句なり。老先生 試みに看よ此の三語が何れの處にも着く可からざるを。近時、常に此れを用いて記號(しるし)と爲して弊を爲す者あり。原とより以て中らざる可きの處あり」と。予(李光地)云う「老先生 此の如きを要せず。蓋し^{われわれ}我們 場内に在り、總じて文字に憑く。若し此の如く搜

求すれば、却って搜求し盡くさず。又た未だ必ずしも盡く當てるべからず。況んや此の卷は會元と^な倣すも得ず、[しかし] 却って我們の這の一榜(試験)の状元なるをや」と。京江(張玉書)遂に黙然として第八に置く。阮亭(王士禛) 潜かに人をして京江(張玉書)の旁(かたわ)らに在らざるを伺わしめ、予(李光地)に問わしめて曰く「適(いましがた)の那の一卷は^{あた}怎樣了(どのようなになったか)」と。予(李光地) 云う「已に^{あた}申れり。且つ十名の内に在り」と。使 回りて報ず。阮亭(王士禛) 方に喜ぶ。此の[後の]科(殿試)は戴有祺 状元なるも、乃ち上科の補試なり。吳昺 榜眼たるも、實は此の榜の状元なり。京江(張玉書) [採点の] 當日 予(李光地)の言を聞き、並びに駭問せず。想うに亦た此の卷に富貴の氣象を覺得せしならん。今より之を思えば、澤州(陳廷敬)・阮亭(王士禛) 眞に胸中 毫も一物の空空洞洞なし。京江(張玉書) 大いに掛牽する所あり。畢竟するに江南の人は此れを以て人生の^か少く可からざるの事と為す。惠周惕の如きは、昔し阮亭(王士禛)の門に遊び、師友 至密なるも、其の會元を打落す者は、即ち阮亭(王士禛)なり(『榕村語錄續集』 卷十八・治道・三十五～三十六葉)。

(王士禛もまた、吳昺の答案を熱心に推薦して、五番以内に置こうとした。張玉書が躊躇すると、王士禛は怒って「まさかこの答案を、あなたはかんたんに合格させようとしなないというのではないか」と言う。張玉書もまた怒り、微かに頷いて低い声で「そういう意味です」と答えた。王士禛は答案を机のうえに投げ捨てて行ってしまう。張玉書は私(李光地)に向かって「髭おやじ(王士禛)は可笑しい。この答案は文章は、[よくできているので]合格にすることができるのです。ただ、この中の三編の回答の末尾が虚字を用いています。李光地先生、ご覧なさい、この三字の虚字は意味としては続かないものでしょう。近ごろは、いつもこの方法を用いて記号として不正を行なっているのです。本来ですと及第にすべきではないのですが」と言う。私(李光地)は言う「張玉書先生、そのようなことはなさらないで下さい。そもそも、私達は試験場においてはすべて文章にのみ基づいて[判断し

て] おります。もしもこのような不正を捜し出していったならば、かえって捜しつくすことができなくなってしまう。そして、またうまく追求しきれないことを心配します。ましてや、この答案は会元にはできませんでしたが、私たちの所では第一位(状元)にしようとしたのですから」と。張玉書はとうとう黙ってしまい、第八位に置いた。王士禛はこっそりと人をやって張玉書が部屋にいないのを伺わせてから、私(李光地)に尋ねさせた「いましがたの答案はどうなったのか」と。私(李光地)は「すでに及第です。また第十位以内になっております」と答えた。その人が帰って報告したら王士禛はほんとうに喜んだ。この後の殿試では戴有祺が状元であったが、前回の会試からの補欠受験者であった。[だから結果として] 吳昺は榜眼ではあったが、実際のこの殿試の状元であった。採点の当日、張玉書は私(李光地)の言葉を聞いて、驚かなかった。私(李光地)が思うにはこの吳昺の答案に富貴の気を感じたためであろう。今から考えれば、陳廷敬も王士禛も本当に胸中は一物もなく空空洞洞としたものであったろう。[それに比較して] 張玉書はたいそうな引掛かりを持っていたのである。つまり、江南の人達は科挙を人生の欠くべからざる事としていたためだろう。惠周惕のごときは、昔からの王士禛の門人であり、子弟関係も密であったのに、会元の地位から落としたのは王士禛であった)

いま、吳昺の四書題の答案のうち、「顔淵季路」章(『論語』公冶長)の結句を見てみると次のように末尾の三語ではないが二語が虚字になっている。

此賢者之志，必衷於聖人也夫(光緒丁亥『國朝元魁墨萃』三十二葉所収)。

さてここで吳昺の答案を王士禛が積極的に推薦したのは、何故か。そもそも、吳昺の父は吳國龍(萬曆四十四年〔1616〕～康熙十年〔1671〕)であり、その双子の兄が吳國對(萬曆四十四年〔1616〕～康熙十九年〔1680〕)であった。吳昺からすると叔父にあたる吳國對は順治十五年(1658)の一甲三名(探花)の進士である。同年の及第者に王士禛と陳廷敬とがいる。つまり、同年の仲間のために王士禛が敢えて強力な推薦を行なったとも考えられる。また、吳國對の墓誌銘は陳廷

敬が書いている(『午亭文編』巻四十五・誌銘・「翰林院侍讀吳默巖墓誌銘」)。

ところで、李光地はここでまったく呉昺の答案の採点に中立の立場を取っていたように自分では述べている。しかし、呉昺の伯父の呉國對は、李光地が康熙六年に福建郷試を受け、第三位で及第した時の正考官であった。つまり、呉國對は李光地の座主だったのである。

そのうえ呉國對は李光地を特に注目していた。李光地の年譜である『文貞公年譜』康熙五年丙午条には次のようにいう。

秋八月、福建郷貢に擧げらる。主考は呉公國對と王公汝裴にして、同考は王公三薦なり。呉公(呉國對)は戊戌(順治十五年〔1658〕)に第三人(探花)で及第す。人を知るの鑑あり。是の冬、同榜の呉君曾芳ともと偕に計り、道に呉公に遇う。……[そして呉國對が]公(李光地)を指さして曰く「李君は精魄内に凝し、神形に餘る、此れ大器なり。君宜しく以て『楷と爲るべし』(『禮記』儒行)」と(『文貞公年譜』康熙五年丙午条・卷上・九葉)。

さらに『榕村語録續集』でも、次のようにいう。

予(李光地)初めて賢書に登り(郷試に及第すること)、衆に随いて[郷試の]座主(呉國對)^{まみ}に見ゆ。呉[國對]^{あま}偏ねく觀て、獨り予を指さして曰く「李兄第一(もっとも)遠大(すばらしい)なり。其の精神足りて、皆に内に斂す①」と。[そして]衆の同年に示して曰く「汝が輩は、皆な宜しく此れに學ぶべし」と(『榕村語録續集』巻十三・本朝時事・六葉)。

①石印本は「斂」に作る。

(私(李光地)が初めて郷試に及第した時、みんなといっしょに座主の呉國對先生にお目にかかった。呉國對先生は、面会した挙人たちを見渡して、ひとり私(李光地)だけを指差して「李光地君がいちばんすばらしい。気持ちちが充ちて、内にあふれている」とおっしゃった。さらに、他の挙人たちに「みんなは、李光地君に學ぶべきである」と示された)

郷試に及第したばかりの二十五歳の李光地にとって、探花で進士となった呉國對のこの言葉は最高の名誉であつたろう。

この康熙三十年の会試の時には、呉国對はすでに亡くなっているが、自分を抜擢してくれ、しかもいま述べたように特に暖かい言葉をくれた先生の甥の答案である。李光地は何も言わないが、やはり手心を加えた可能性はあるのではないだろうか。

どうも張玉書のみが、この呉昺とは関係がなかったようだ。慎重な李光地はいつもの通り、自分からは積極的に動かず、他人が行動を起こすのを待って、中立を装いながら加担するというやり方をとった。「呉昺は榜眼(第二位)であったが、実際のこの会試の状元(第一位)であった。当日、張玉書は私(李光地)の言葉を聞いて、驚かなかった。私(李光地)が思うにはこの呉昺の答案に富貴の気を感じたためであろう」と李光地が証言するのは、張玉書を除く全員が呉昺の後押しをしているのを張玉書を感じたためであろうか。

(2) 採点の後で

『欽定科場條例』によれば、会試の答案は出版することが定められている。そして、正考官が前序を、副考官が後序を書くことになっていた。

一 試録を進呈すること。正・副考官は闈中に於いて中式(ごうかく)する三場の試卷を將って、毎題ごとに一篇を遴選し、正考官は前序を撰し、副考官は後序を撰し、闈を出づるの後に提調[官]に交(わた)して刊刻せよ。順天鄉試は府尹に由り、會試は禮部に由りて恭しみて進めよ………(『欽定科場條例』卷四十七・一葉・試録登科録・現行事例)。

李光地は、その『辛未會試録』の後序に、次のように記している。

………古(いにしえ)は卿大夫 天子の爲に士を擇ぶは、必ず其の徳行道藝の實を得て、私を容れる無し。科目の設けらるるや、謄書・糊名有りて、以て曲さに之を爲し、期するを防ぐは、固より臣士の恥なり。若し又た其の物色するの私意を以て、謄書・糊名の中に行なうは、此れ爲^{なす}に吾が君に負かんか、天下の士に負かんか。亦た其の炯然たる方寸の心に負くのみ………(「辛未會試録後序」・『榕村集』卷十一)。

科目(科挙)の制度がはじまり、不正防止の対策が講じられるようになったのは、恥ずかしいことである。また、その不正防止対策にもかかわらず不正を行なうのは、すべての人に背くことであるという。

また、張玉書は、前序で次のように述べる。

……臣 惟うに主司の憑^{もと}づく所の者は、士子の一日の文なるのみ。其の文 度に合えば、則ち之を録せず、度に合わざれば、則ち之を黜く。其の人宿(もと)より文譽を負うと雖も、而れども主司と爲る者、其の一日に短黜に因りて録す。即ち怨謗 滋ます起るも、恤れむ能わざるなり。且つ既已(すで)に糊名して書を易うるも、或いは名を好みて謗らるるを懼るを以ての故に稍や一を存し之を揣摩物色し、以て冀倖(僥倖)を一旦に見し、名づけて「憐才」と曰わんと欲するは、其の私の一なり。臣 誓いて諸臣と力めて之を戒む。言は心の聲なり。帖括の文は、以て制舉に應ずると雖も、而れども其の精神心術の在る所、或いは正、或いは邪、或いは誠、或いは偽、未だ嘗て議論離合の間に發露せざるにあらず。第だ衡文なる者、深く察せざるのみ。夫れ黷明の堂下の一言に、叔向 猶お聲を聞きて其の人を知るが如し①。況んや三たび其の文を試みるものをや。臣 顧みて諸臣と力めて之を勉む………(「辛未科會試録序」『張文貞集』巻四)。

- ①『春秋左傳』昭公二十八年に「昔、叔向 鄭に適く。黷蔑 惡(みにく)し。叔向を觀んと欲し、使の器を收めんとする者に従う。往きて堂下に立ち、一言にして善し。叔向 將に酒を飲まんとして之を聞きて曰く『必ず黷明ならん』と。下りて其の手を執りて以て上る………」。

文名があるものでも、試験の結果だけで判断する。名前を伏せて文字を変えているのに、「憐才」といって余計なことをするのは、「私」であるというのである。

このように、李光地と張玉書の二人ともにこの会試の採点にあたっては、一言ありそうである。

李光地の『文貞公年譜』の「春二月、充會試副考官」条でも次のように述べている。

公(李光地) 寬裕(寛大) 休容(寛容)なるも、獨り科場の託請の弊に于いて、「義 色に形わし」(『公羊傳』 桓公二年)、以爲らく、人品を壊し、風化を傷つけるは、此れより甚だしと爲すものなしと。虚聲を採ると賄囑を受けるとは、厥の罪 維れ均し。又た以(おも) えらく制義とは、傳註を遵守し、六經を佐佑し、人をして經を窮めて理を明きらかにし、極めて世教に補すること有らしむ。[しかし] 才氣 驚驅して、名 貌古なりと爲すも、實は經旨と背馳すれば、則ち糞壤を拵撫(取得)し、勢い必ず晦渋蒙昧にして、晩明の心聲と爲るが若し。此の如ければ、治忽(政治の得失) 何をか徴せん。故に闇に入りて、張公玉書・陳公廷敬・王公士禎と心を同じくして弊を剔^{のぞ}き、極力純に還さんとし、張瑗等百五十人を取る(『文貞公年譜』 卷上・康熙三十年条・五十一葉)。

李光地は、科挙における不正に対して憤っているのである。

周知のように科挙の不正行為については、たびたび禁令が出される。それだけではなく、非情な弾圧事件も行なわれた。だが、試験官に任命された高級官僚にとっても、自分の弟子を作り派閥を拡張する絶好の機会であった。それが、高級官僚も不正行為の絶えなかった原因ではなかったのだろうか。

このように李光地と張玉書とは、あくまでも慎重である。おそらくここで、この二人が科挙の不正について触れているのは、もしものことを考慮しての発言ではないか。もしも、この会試の不正について弾劾する者が出たら、二人はこの発言を盾に取って言い逃れをするつもりであったのではないだろうか。なにしろ、この発言が載せられている『辛未科會試録』は、康熙帝に提出されるものであるからだ。それに比べると陳廷敬・王士禎の二人は巧妙でない。

王士禎は、ただ有能な人物を選抜したいと述べるだけである。

臣(王士禎) 昔 士^{ちか}を西蜀に校し(康熙十一年四川鄉試正考官)。公に矢い慎^{ちか}に矢いて、眞才に非ざるを得て、以て簡命を辱めるを恐る。然れども一郷一國は以て十五國の風氣の變を盡くすに足らず。今、天下の才を合わして臣等を數人をして衡量して之を甄別す。臣 幸いに藉手(援助)を獲て以て

竊かに古人の推賢進達の義①に附す。廉頑敦薄②に至りては實に士風に關す、皇上(康熙帝)の殷殷として諸臣に委任するの意は至って深く且つ厚し。又た何ぞ敢えて審慎を倍加せざらんや。冀わくは一二の戴仁・抱義③正直・廉退④の士を得て以て寧に當りて⑤側席の求⑥に仰ぎ副えん(「辛未科會試錄後序」『帶經堂集』第六編・『蠶尾文集』卷一・十八葉～十九葉)。

①『禮記』儒行に「儒に内稱は親を辟けず、外擧は怨みを辟けず、功を程(はか)り事を積み、賢を推して之を進達(すいきよ)し…………」。

②『孟子』盡心下に「孟子曰く、聖人は百世の師なり。伯夷・柳下惠是なり。故に伯夷の風を聞く者は、頑夫も廉に、懦夫も志を立つる有り。柳下惠の風を聞く者は、薄夫も敦く、鄙夫も寛なり…………」。

③『禮記』儒行に「儒に忠信以て甲冑と爲し、禮義以て干櫓と爲し、仁を戴きて行き、義を抱いて處り、暴政有りと雖も、其の所を更へざる有り…………」。

④『禮記』樂記に「…………正直にして静か、廉にして謙なる者は、風を歌うに宜し…………」。

⑤『禮記』曲禮下に「天子 寧に當りて立ち、諸公 東面し、諸侯 西面するを朝と曰う」。

⑥『後漢書』章帝紀に「夏五月辛亥、詔して曰く、朕 直士を思遲して、側席異聞す」とあり、李賢注に「側席とは、正坐せざるを謂う。賢良を待つ所以なり」。

また、陳廷敬も不当な答案は及第させていないといい、次のように述べる。

臣(陳廷敬) 甫めて闈に入り遂に同事の諸臣と司盟に誓告し、主知を萬一(わずかながらも)に答えんことを冀う。…………空を蹈み虚を襲い、其の辭説を支離にするが如き者は、皆な擯け、敢えて以て[『辛未科會試錄』に]録せず。蓋し我が皇上の實學を崇とび虚聲を黜けるの至意を仰ぎ體すればなり。夫れ一朝の取舍は即ち吏治の關する攸・民事の係る所なれば、録する所の不當なるが若きは又た且に以て天下に負く…………(「辛未科會試錄序」・『午亭文

編』卷三十五)。

王士禎・陳廷敬ともに、なんの屈折もなしに述べている。そこが、李光地に「今より之を思えば、澤州(陳廷敬)・阮亭(王士禎)は眞に胸中 毫も一物の空空洞洞なし」と言われた理由ではないか。

以上、見てきたように李光地の証言によると康熙三十年の會試の採点においては、かなり不明朗なことが行なわれていた。そして、考官たちには誰の答案か分からないようにしてあるはずであるが、採点の段階では、誰の答案かは分かっていたようである。

なお、九年後の康熙三十九年に、康熙帝が、この年の会試及第者には、大臣の子弟が多すぎるという。

上(康熙帝) 大學士等に諭して曰く「九卿の議(提議)する所の考試の一事を觀るに、科道 亦た心服せず。況んや今年の會試の中る所は大臣の子弟 居多なり。孤寒の士 未だ入穀する能わず。此の如きも、人心を服せんと欲して、得んか……………」と(『聖祖實錄』卷二百・康熙三十九年七月乙卯(二十四日)条)。

このことは、康熙帝が高級官僚たちが行なった受験者に対する配慮に対して苦言を呈していると理解できないだろうか。